

タイトル：ディズニープリンセスの変遷

学籍番号：2213090

名前：湊崎愛琳

■ 概要説明

世界中の人々から愛され、多くの女性の憧れでもある「ディズニープリンセス」。ディズニー史上初のプリンセスが誕生し、ディズニー映画の新たな歴史を刻んだ1937年公開の『白雪姫』から『ラーヤと龍の王国』(2021年)まで、数多くの多様なプリンセスが生み出されている。華やかで美しい容姿に煌びやかなドレスを纏い、温厚で優しい人柄のプリンセス、好奇心旺盛で勇敢なプリンセスなど、ディズニープリンセスという一つの枠組みの中でも、その時代に沿った女性のあり方や生き方、考え方は絶えず変化し続け、年々新たなプリンセス像を更新している。時代とともにプリンセス像がどのように変わってきたのかを当時の時代背景と照らし合わせ、特徴を明確にし、今後のディズニープリンセスの展望を論じる。

■ 目的

男女の平等や多様性が叫ばれている現代において、漫画やアニメでも「らしさ」の価値観にとらわれないキャラクターが多く生まれている。その中で昔から今も変わらず、幅広い世代から多くのファンを獲得し続けているディズニープリンセスもその時代の女性像や思考に沿って変化してきたのではないかと考えたため、ジェンダーの視点から作品を見て、具体的な変遷を明らかにする。

■ 方法

『白雪姫』『リトル・マーメイド』『モアナと伝説の海』の3作品を視聴し、それぞれのプリンセスの性格や生き方などを比較する。その後、ディズニー映画におけるプリンセス像が具体的にどのように変化してきたのかを、作品が公開された年代の時代背景と照合しながら明らかにしていく。

■ 結果とまとめ

幸せを待ち続けているプリンセスから、自分から行動して幸せを掴みに行くプリンセスへと変化していった。また、プリンセス像だけでなく話の展開も、最終的に王子と結婚するストーリーから、自分の夢を叶え自分なりの幸せを追求するストーリーへと変わっていった。プリンセス一人一人が、その時代を生きてきた女性の象徴である一方で、「諦めない心」「信じれば叶う」というプリンセスのメッセージは昔から変わることなく、全ての映画に共通している。今後も、ジェンダー観や多様性など時代に沿ったプリンセスが生まれると判断できる。私にとって、ディズニープリンセスが心の何処かで励ましてくれるような強い存在であったように、こ

れから先も人々に力を与え続け、皆の憧れになるようなプリンセスが誕生するに違いない。

鹿児島女子短期大学 教養学科 松下ゼミ

「おとな」になるということ（『遠い声、遠い部屋』より）

学籍番号：2213039

名前：藤澤柚美香

■概要説明：

「おとな」になるとはどういうことか。その疑問を、『遠い声、遠い部屋』という作品を通して解消したいと考えた。この作品は「早熟な天才」トルーマン・カポーティが20歳から23歳という、私たちとさして変わらない若さで書き上げた初の長篇小説である。同時にこの物語は、主人公ジョエルと同じように孤独で不幸な子ども時代を送り、また自らホモセクシュアリティを公言していたカポーティの半自伝的な作品でもあった。この作品を通して私は、成長を遂げる少年の「自我」に焦点を当てながらカポーティにとっての内的成長を考えた。物語は母親を亡くした13歳の少年が、父親からの手紙を頼りにアメリカ南部のある田舎町を訪れる、父親探しの旅から始まるひと夏を描いている。奇妙な登場人物が次々と現れ少年の自我を混濁させながらも、最後には主人公は自らの少年時代の終わりの訪れを感じ取り、自分が背後に残してきた「少年」の姿を目にすることで結末を迎えた。

■目的：

自分は精神的にも「おとな」になることができているのか、いつから「おとな」になったのかという疑問を解消するため。

■方法：

『遠い声、遠い部屋』を実際に味読し、関連する文献や論文から内容を紐解いていく。また作者の生い立ちを調べ、読解の手がかりにする。

■結果とまとめ：

父親を知ることによって自分が誰かを知ろうとした孤独な少年の自分探しの物語は、父親からの脱却による自我の認識、そしてセクシュアリティの発見による自我の確立を経て、少年の内的成長へと帰結した。同時に、この物語は主人公ジョエルの「おとな」への成長を描いただけでなく、ジョエルにかつての自己を投影した刊行当時23歳のカポーティが、子ども時代の自分自身を掘り起こし、そこから抜け出して「おとな」になるために執筆した作品でもあった。しかし、この作品が出版された当時その評判は賛否相半ばした。その要因の一つとして、当時の1948年アメリカでは同性愛は異常として弾圧が始まりつつあったという背景が挙げられた。研究の結果、新たに判明したこの問題については扱うことはできなかったため、今後の課題としたい。

2023 (R5)年度 プロジェクト演習

タイトル：チャーリーとチョコレート工場

学籍番号：2213034

名前：野元奈々美

■概要説明

アメリカを題材にした短編小説を読み、その小説の批評を読む。批評を読んで自分のわからなかった部分をグループで話し合い深く掘り下げていくことが活動の主だった。各小説で、三人ぐらいつつ、一枚の紙にそれぞれまとめ理解を深めていった。特に物語の時代背景に目を向け、その当時の様子を知り、歴史についても学ぶことができた。三作品ほど、この流れを繰り返し、そのあとは、自分で作品を決めその作品について自分が考えたこと、授業で経験したことを活かし、作品を深掘りしていき論文をそれぞれで作成した。私は、『チャーリーとチョコレート工場』について調べ、論文にまとめた。『チャーリーとチョコレート工場』では、主人公と他に出てくる4人の子供、それぞれの家の経済力に大きな差があった。そこで、貧困というテーマに目を向け論文を書くことにした。原作に目を向けることがなかったが、映画公開の2005年の貧困について調べてしまったため、貧困に関しての歴史に結びつけることがとても難しかった。しかし、家族の絆や貧困だからこそそのプラスな面に目を向ける新たな視点を見つけることができたと考えている。今までの映画の味方とは違った味方をするのができた新しい経験になった。

■目的

アメリカを舞台にした作品に触れ、英語と関わったり、歴史、時代背景について知ったり、映画をただ見るだけではなく、深く掘り下げていくことで理解を深めることができる。色々な資料を読み自分の考えとの違いを主張したり、新たな考えに触れたりすることができる。アメリカ文学に触れることが大きな目的だと考えた。

■方法

自分で調べたい題材をみつけ、その作品に関連する本、論文、インターネットでの情報を集め、論文につなげていく。自分の推測、感じたこと、考えたことを書いていく。集めた資料の中での意見を取り入れ、自分の考えと比べていき、その意見に対して肯定的な意見を持ったか否定的な意見を持ったかをまとめていった。否定的な意見のときは、自分はこう思ったなど自分の意見も交えながら論文を作り上げていった。

■結果（まとめ）

映画を何も考えずに見ているときと違い、少しの短い場面が深い意味を表しているのではないかと考えるようになった。チャーリーとチョコレート工場では、ただ貧しい子が運良く残っていき賞を勝ち取ると単純に考えていたが、貧困という問題から他の出演者にも着目して映画を深く読み取っていくことで、今まで見えていなかった内容が見えとても面白く感じる事ができた。例えば、貧しさを味合わない子はとてもわがままであり、それに比べてチャーリーは、真逆の正

確であったことにとっても興味が湧いた。物語の設定だったとしても、共通点を見つけて理解できたときの面白さを知ることができた。この授業を通して、物語に対して疑問を持つ大切さを知ることができた。そして、考察力を身につけることができた。

『ピーター・パン』からみる人種差別

学籍番号：2213087

名前：古川愛莉

■概要説明

私は、『ピーター・パン』から見た人種差別について調べた。『ピーター・パン』の原作の中にインディアン達とウェンディに対する人種差別があることを知った。調べたことは、原作者ジェームズ・マシュー・バリューの生い立ちや『ピーター・パン』以外の作品、『ピーター・パン』における差別が描かれる場面だ。まずバリューは、1860年にスコットランドのキリアムという小さい村に10人兄弟の下から2番目として生まれた。父デイヴィッドは貧しい手織り職人で、母マーガレットは石工の娘で子どもたちの教育に熱心でたくさんの教材を与えられていた中でバリューは育った。バリューが手掛けた『ピーター・パン』以外の作品で代表作は『小さな白い鳥』『あっぱれクライトン』である。人種差別されている場面は、子どもたちにピーター・パンが「インディアンを捕まえてこい」と言っている場面やインディアンたちがウェンディに対して「女は薪を運んでろ」と言っている場面に現れていると考えた。

■目的

『ピーター・パン』を選んだ理由は、ディズニーが好きだったこともあったが、『ピーター・パン』の時代背景やどのようにして『ピーター・パン』が作られたのか興味が湧いたからだ。また、どうしてステレオタイプや女性差別を作品の中に取り入れようとしたのだろうか気になったからだ。

■方法

図書館で本を借りて原作や『ピーター・パン』について解説されている本を読んだ。また、インターネットを活用して『ピーター・パン』についての論文も読んだ。

■結果・まとめ

『ピーター・パン』は、原作者であるバリューの生い立ちをもとにできた長編アニメーションであることがわかった。映画にステレオタイプなどを取り入れることによって物語の幅が広がるのかもしれないと考えた。

タイトル：「アンクル・トムの小屋」

学籍番号：2213064

名前：坂元ひかり

■概要説明：

『アンクル・トムの小屋』は、アメリカの女流作家であるハリエット・ビーチャー・ストウ（1811～1896）が書いた小説である。黒人の悲運と奴隷制の非人道性を書き出し、奴隷制廃止を世間に訴えた作品であり、南北戦争の引き金となるほど世界に大きな影響を与えた文学作品であるとされている。

舞台はアメリカ、ケンタッキー州。物語は主人公である黒人奴隷のトムと、同じく奴隷のエライザの息子が奴隷商人に売られようとしているところから始まる。トムはシェルビー家に仕えていたが、その家は借金を抱えてしまい、返済として売られてしまう。トムは、売られていく途中でシンクレアの娘、エバが溺死しかけたところを救い、召使としておいてもらえる事となった。しかし、シンクレアの死後、再び売られることとなり、新しい主人であるレグリーの残虐さによって生涯を終えることとなる。

■目的： アメリカでは人種差別による問題が今も根深く残っている。その背景には植民地化や奴隷制が関係している。

黒人奴隷制度とは、黒人を私有財産、商品として扱うことを指す。奴隷はささいな犯罪でもムチを打たれ、主人の暴虐を訴えることも、法廷での証言も許されなかった。奴隷として連れてこられるのは殆どが西アフリカの黒人であった。今では考えられないことだが、19世紀、当時の人々にとって、黒人は劣った生物であるから奴隷として置かれるのは当然のことであるとされていた。奴隷制度が廃止され、多様な民族・人種が自由に集まり、生活できるようになるまでに人々の中でどのような変化が起きたのか。『アンクル・トムの小屋』を読み、当時の時代背景を読み解いていくとともに、奴隷制度廃止運動にどのような影響を与えたのかを考察していく。

■方法： 『アンクル・トムの小屋』を読むほか、アンクル・トムの小屋について考察した内容が書かれた本や参考にして書かれた文献を読み、奴隷制との関わりと南北戦争との結びつきに付いて理解を深めた。

■結果とまとめ：

ストウが手掛けた『アンクル・トムの小屋』では、奴隷制に翻弄される当時の人々の様子や、アフリカ人種が受けてきた不当な扱いを知ることができた。

この作品は、人々に奴隷制の残酷さと非道さを訴え、人々の心を動かし奴隷解放の声を高めることに成功したが、その人気は南北戦争を起こすきっかけとなってしまった。このことから奴隷制度を単純に悪と決めつけるだけでは問題の解決にならないのではないかと考えた。今でも人種や地位による差別はなくなっておらず、黒人差別はアメリカの抱える問題として挙げられている。

「黒人は劣った存在である」「暴力的で野蛮な生物である」といった偏見をなくさない限り問題は解決しないのではないかと結論に至った。

2023 年度プロジェクト演習

タイトル：ホーソーントンと自我の関わり

学籍番号：2213088 名前：松岡菜々子

概要説明

ナサニエル・ホーソーントン作「牧師の黒のベール」という作品について調べ、ホーソーントンの「自我」が作品に齎している影響を調べた。ホーソーントンは 19 世紀アメリカの著名な作家で、アメリカ文学の重要な作家の一人として広く認識されている。1804 年 7 月 4 日、アメリカマサチューセッツ州のセイラムに生まれた。彼の父方の先祖はセイラム魔女裁判の判事をしていたという。ホーソーントンの作品は、当時のアメリカの歴史や宗教的観点などから見ることができる。ホーソーントンの作品は「罪」と「罰」が特徴であるといわれており、彼の作品を象徴する「罪」というのは、聖書や彼の祖先の歴史などに由来していると思われる。彼の生涯や先祖が与えた影響は大きく、またキリスト教の考え方なども相まっている。あらゆる文学作品はそれを創作した作家の影が何らかの形で反映していることがある。実体験を交えて話を書いたり、当時の生活環境や歴史などをもとにルポルタージュ的なものを描いたり、主人公と自身を重ねることによって、よりリアルに歴史や場面を捉えることができる。主にそこに着目して、「牧師の黒いベール」に及ぼしている「自我」を読み解いていった。

目的

ナサニエル・ホーソーントンは、19 世紀アメリカの著名な作家で、アメリカ文学の重要な作家の一人として広く認識されており、ホーソーントンの作品は、当時のアメリカの歴史や宗教的観点（主にキリスト教）から読むことができる。彼の宗教観が作品に及ぼした影響、彼の先祖や生き様などが作品に及ぼした影響を調べ、自分なりに「牧師の黒のベール」についての考察をして理解を深める。最後の講義で研究内容の発表をして自分の研究内容と他の人の研究内容から文学の奥深さを読み解く。

方法

ホーソーントンの短篇集を読み、なにも調べないで自分なりに作品の考察をする。ホーソーントンについて書かれた図書や論文、「牧師の黒のベール」について書かれた論文を読ながら、彼の生い立ちや彼の先祖がしてきたことというのをより深く調べる。自分なりにまた考察を立てて、結論を導く。

結果、まとめ

牧師の黒のベールには、ホーソーントンの育った環境と先祖がかつてしたことが関わっており、様々な観点から考察することができた。

文献などを読む前の自分なりの考察では、作中に何度も強調される「黒いベール」と「牧師の微かな笑み」について考え、ベールは死の象徴であること、牧師の笑みは作者の生き様であることを結論とした。また、ホーソーントンの別の作品の中から考察を広めていき、「黒いベール」という

のは、ホーソーンの『緋文字』という作品でいう主人公の服に付けられた「罪の証 A」であり、罪の象徴であるという考えに行き着いた。本や文献などを読むと、自分の考察と同じ考えのものと、新しい発見があった。

ホーソーンの生い立ちに関する本や文献を読み、ホーソーンは牧師と自身を重ねているのではないかという考察に出会う。これは設定したテーマである「自我」と結びつけて考えることができる。

ホーソーン作品『緋文字』の序文にある「税関」の中に、ホーソーン先祖について語っている箇所がある。その中にホーソーン先祖は、セイラム魔女裁判に深く関わりがあるという記述があった。セイラム魔女裁判は、魔女狩りと関係のある凄惨な事件である。

ホーソーン先祖が「セイラム魔女裁判」に関わっていて、彼の故郷であるセイラムは自分の一族が深い根を張っているところであり、先祖が生前にしていた残虐行為がしがらみとなって作中に反映しているのではないかと考えられるという。自分と先祖の本姓は切っても切れない絆で結ばれているとの記述あり。ホーソーンの中にある悲しむべき事柄があり、主人公である牧師と作者自身を重ねてある。牧師の心の中には、ホーソーンの心があり、ベールを着用し、悲しい笑みを浮かべている牧師のその姿は、先祖の歴史を悲しみ、隠したくなるホーソーンの苦悩の表れであることがわかった。

牧師の黒のベールには「ある寓話」という副題がつけられている。寓話とはある教訓的な内容を擬人化した動物や自然現象などを主人公に作った物語のことで、「北風と太陽」などが有名である。寓話には大人の失敗が込められているという。

以上のことから以下の考察を導き出した。

①人を殺したら永遠にその罪を抱えながら生きていかなければならないという教訓を促すために書いた。

②作者自身を得るための教訓（寓話には大人の失敗が込められている。ここでいう大人の失敗とは先祖やセイラムに住んでいた人々がしてきた行為であり、これはホーソーン先祖の残虐な歴史（失敗）であり、先祖を風刺したものであり、作者自身への教訓）である。

タイトル：「最後の一葉」の時代背景

学籍番号：2213054

名前：大山奈々江

■概要説明

アメリカ文学の作品を1つ選び、ジェンダー問題、差別、環境、歴史などテーマを決めて、決めたテーマについて論じる。私は、オー・ヘンリーの執筆した「最後の一葉」について研究することにした。オー・ヘンリーは本名をウィリアム・シドニー・ポーターという。出身はノースカロライナ州グリーンズバラで、幼い頃から多くの言語を扱い、画家としての才能もあった。銀行に勤めていたときに公金横領の疑いで逮捕され、約3年間服役することとなった。そのあとはニューヨークに渡り、多くの作品を残していくこととなる。この「最後の一葉」という作品はニューヨークを舞台にした話であり、ジョンシイとスウという二人の画家と、老画家のベアマンが出てくる話である。肺炎にかかってしまったジョンシイをスウが元気付けようとするが生きる気力をなくしてしまっている。そこでベアマンが自分の命を犠牲にして壁に一枚の葉を描き、ジョンシイの命を救うという話であった。この物語を書いたオー・ヘンリーと作品が書かれた時代を考えながら読み解いていきたいと思う。

■目的：

オー・ヘンリーがどのように生きてきたのかということ踏まえながら、その過程でどんな物語があったのか見ていく。そして、作品が書かれたのはどんな時代だったのかという時代背景をテーマに考える。また、主人公が女性ということで、当時の女性の活躍の様子なども考えていく。

■方法：

まず、扱う作品である「最後の一葉」を読み、疑問に思ったことや気になったところを絞り込む。そして、オー・ヘンリーの伝記を読んで生まれた時代やどんな人生を送ったのかを理解する。また、アメリカ文学の歴史について書かれた本を読み、時代背景にどのような出来事があったのかを把握する。インターネットや図書館で「最後の一葉」について書かれた本や論文を調べ、自分自身で気になったところと見比べながら考察していった。

■結果とまとめ：

オー・ヘンリーの「最後の一葉」を読み、時代背景を考えながら考察していくことで、オー・ヘンリーがどんな人物で何を考えてこの作品を書いたのかどんどん興味が出てきた。最初はただ自分の命を犠牲にして人を救ったベアマンの自己犠牲の感動的な物語だと思っていたけれど、時代背景や作者の人生を知ることによってまた違った見方をすることができ、面白いと感じるようになった。しかし、「最後の一葉」に関して書かれている論文が少なく、自分の考えで補わなければならないところや、時代背景を考えてみてもうまく繋がらないところなどもあったため、もっと詳しく当時のことを調べる必要があったと思う。一つの文学作品に関して自分で考察していくことは難しかったけれど、これからまた違う作家の文学作品を読んでいく中で今回やったような研究は役に立つと思うし、新しい見方ができるようになったため、良い学びになったと思う。

タイトル：『八月の光』があらわすアメリカの歴史と文化

■概要説明：

アメリカ文学作品では、アメリカの歴史や文化をテーマとして取り扱っているものがある。一年時に受講した文学の講義で、アメリカの人種やジェンダーに関する問題に触れたことがあり、それからアメリカ文学の人種問題を取り扱っている作品について興味を持つようになった。

今回アメリカ文学作品を研究する上で、フォークナーの『八月の光』という作品が人種問題をテーマとして取り扱っていることを知り、研究したいと考え、作品の分析を行った。研究した内容は、二つある。

一つ目は、物語のあらすじと構成、登場人物に共通していることを調べた。二つ目は、舞台となっているジェファソンという町と実際のアメリカ南部の町と、リーナ・クリスマス・ハイタワの3人の境遇をジェンダーや人種問題(白人至上主義、白人と黒人の混血の人々の扱いなど)といった実際のアメリカの歴史・文化などと比較した。

■目的：

『八月の光』を研究するにあたり、アメリカの人種問題のどのような部分を描写しているのか(白人至上主義、白人と黒人の混血の人々の問題など)を分析し、さらにアメリカの歴史や文化を学びたいと考えた。

■方法：

参考文献として、主に以下のものを使用した。

ウィリアム・フォークナー 諏訪部浩一訳『八月の光 上・下』

M・スプリング編 小林富久子訳『アメリカ文学の中の女性 フェミニスト視点によるもう一つの米文学史』

田中久男監修 亀井俊介, 平石貴樹編著『アメリカ文学研究のニュー・フロンティア』

中村一夫著『アメリカ文学における孤独の諸相』

■結果とまとめ：

この作品を研究してみて、『八月の光』という物語は、3つの物語に分かれていながらも、次第に関連性を帯びてくるなど、とても複雑で理解するのに時間がかかった。リーナとクリスマスに関しては、実際のアメリカの人種問題やジェンダーといった歴史との関係性を元に研究することができたが、ハイタワという人物に関しては、どのようなアメリカの歴史を元に形成されたのか非常に理解しづらかった。しかし、全体を通して、『八月の光』が表しているのは、アメリカの人種問題とそこにある孤独と疎外感なのではないかと考えた。このように、『八月の光』をはじめとしたアメリカ文学作品では、アメリカの歴史的背景や

文化、ジェンダー、土地などを取り扱っているものがあるので、もし機会があれば、様々なアメリカ文学作品に触れ、歴史的背景や文化などの視点から分析していきたいと考えた。

2024(R6)年度 プロジェクト演習

タイトル：「ある金曜日の朝」（ラングストン・ヒューズ著）から見る黒人差別

学籍番号：2213030 名前：長田恵里那

■概要説明

1941年に書かれた当作品は、ナンシー・リー・ジョンソンという黒人の少女が主人公の物語である。登場人物は、主人公のナンシーと彼女が通う学校の美術教師デートリック先生、副校長のオーシェイ先生の3人が主要人物だ。物語の舞台は、アメリカのジョージ・ワシントン高校という公立学校だ。冒頭部分は、ナンシーが描いた絵が美術のコンテストで受賞した場面から物語が始まる。ナンシーは数年前に家族で、南部から北部へ出てきており、性格はハキハキしていて可愛らしい子だ。そんな彼女を、同級生たちは差別することなく、クラスメイトとして接していることが文章中から読み取ることができる。しかし授賞式の朝、ナンシーが黒人であることを理由に受賞を取り消されてしまう。「こんなことで負けてはいないわ」と自身を奮い立たせ、ナンシー自身が身を持って経験した黒人差別を、次受けてしまうかもしれない他の人のために戦おうと決意する。

■目的

プロジェクト演習の授業を通し、いくつかの作品に触れていく中で差別、主に黒人差別に対する関心が高まった。私たちが生きている現在の社会にも、少なからず差別は存在している。多様性や個性を認め合おうという考え方が求められている現在の社会の中で、必要なことは何か、目指していくべき先はどこなのかを見つけることができればと思う。当書を通してヒューズが何を伝えたいのかを考え、本論を踏まえて、私たちにできることは何か、これからの将来に役立てるようになることを目的とする。

■方法

「ある金曜日の朝」を読み、主に黒人差別に視点を置いて、当時の歴史的背景や著者の過去から作品の内容を分析する。論を展開していくために、著者を取り上げた書籍や論文、インターネット等を参考にする。

■結果とまとめ

「ある金曜日の朝」を通して感じられるのは、この物語はどこか切なくて悲しい展開だということである。ヒューズの作品の特徴としてピーター・B・ハーイの『概説アメリカの文学』によると、「人種的憎悪から白人社会を直接攻撃することはしない。彼の抗議は穏やかで、悲しい願いのように聞こえる」(319)ということが挙げられている。確かに、ナンシーが奨学金を取り消しにされ、悲しみに包まれた空気感は文章中でもよく表れている。単に、取り消しにされたことではなく、黒人だからという理由だけで差別を受けたことに対する悲しみである。またヒューズは当書の中で、終盤になると「夢」という言葉を4回使用している。ヒューズの詩である『夢の変奏曲』(1922年)は詩名に使われている。有名な名言「夢を素早くつかみなさい、

夢が死なないうちに」、「夢をしっかりとつかまえておきなさい。だって、もし夢が消えてしまったら、人生は羽の折れた鳥のようなもの。飛ぶことができなくなってしまうから」の中でも「夢」という言葉が度々使われている。ヒューズ自身が持つ「夢」こそが、「すべての人に自由と正義」があることではないかと考えられる。その根拠は、「ある金曜日の朝」の最後の場面の、全校朝礼の際に、国旗に対して敬意表明したあとのナンシーの言葉だ。それは「それこそが私たちが作らなければならない国なんだわ」という言葉であり、これこそが作品を通じて黒人差別に抗議し続けたヒューズの願いだったのだと考えた。黒人と白人、その他の人種がそれぞれ異なった容姿をしているとしても、それだけで判断せずに容易に差別の目を向けないことが必要なのだろう。

鹿児島女子短期大学 教養学科 松下ゼミ

■概要説明

中学生の頃に、大草原の小さな家の作品を少しだけ見たことがあったので、今回プロジェクト演習を通して、大草原の小さな家という作品を研究してみたいと思った。また、家にある DVD を目にする度にどのような話なのか気になり、研究してみたいと思ったきっかけになった。ある時、母と大草原の小さな家の話をしたことがあったのだが、母と会話をしている中で、大草原の小さな家は、アメリカのドラマだということを初めて知った。アメリカが舞台になっていることを知るまでは、大草原の小さな家の話の展開も想像したことがなかった。アメリカが舞台と言うことを知ってから、作品に対する興味が大きくなっていった。アメリカが舞台となっている作品に触れて、アメリカに対する理解も深められる機会にしたいと思う。

■目的

最初は、作品を通して差別に関することを研究してみたいと思っていたのだが、今回扱ったシーズン 1 では、差別に関する言動や行動のシーンがあまり分からなかったため、インガルス一家の生活から家族・家庭をテーマに描かれていることを考察した。また、作者はどのようなことを伝えたかったのか考えた。

■方法

自宅で DVD を視聴し、論文や本インターネットを活用し、作成する。

■結果とまとめ

家族というと、同じ家に住み生活を共にする、血が繋がっている人のことだとイメージする人もいるかもしれないが、何を強調するかによって家族というものは変わってくるのではないかと感じた。作品の中には、娘が父を助ける場面や母のキャロラインがチャールズを支える場面、もちろんチャールズが家族のために自分を犠牲にしてでも、一生懸命働き家族を支える場面からもチャールズ一家はお互いを思いやりながら協力して生活していることが作品から十分に感じ取ることができる。このことから、作者は作品の中でお互いを思いやることも、家族だということを証明しているのではないかと考えた。子どもが悪いことをしてしまったことを、正直にチャールズとキャロラインに話した場面がある。チャールズは、やってしまったことに対して怒るというよりも正直に話してくれたことに対して褒めていたところがあった。その時にも、チャールズの優しい性格が表れていた。親は、こういう人に育てたい、こういう人になって欲しいという人物像があったのではないかと感じた。チャールズもキャロラインも周りの人を大切にし、親切にしていたことから、チャールズが描いていた家族像は、思いやりがあり、家族の中でも絶えずコミュニケーションをとる、明るい家族を家族像として描いていたのではないと思う。作者は、血縁関係だけで家族というものが決まるだけでなく、家族の定義は人それぞれで違うということも伝えたかったのではないかと考えた。最後に、この作品を通して、インガルス一家のような人柄になることができれば、周りからも愛される人になることができ、何かあった時はお互い様だと、相手を思って助け合うことができるようになると思った。そういう人になれば、社会が平和になることにも繋がる。私たちもイン

ガルス一家のような人柄を目指し、家族像を近づければ自分が満足した人生を歩めるのではないかと思う。この作品から十分に家族愛を感じ取ることができた。インガルス一家のような家族愛があれば、家族だけではなく周りの人にも親切にできると思う。

タイトル: 偏見や差別はどうして生まれるのか - 『シザーハンズ』から読み解く -

学籍番号: 2213036 名前: 平國玲奈

■ 概要説明:

本論文では、人種間、民族間、ジェンダー間、障害の有無などあらゆるところで日々起こる差別や、「違い」や「個性」を受け入れて、偏見を持たないことの大切さというテーマを、アメリカ映画『シザーハンズ』から読み解き、調査した。この作品の切ない恋物語の中に描かれている、ハサミの手を持った人造人間、エドワードの偏見や差別による苦悩や葛藤に焦点を当て、そこから偏見を持つことの怖さ、偏見によって起きてしまう差別、「違い」や「個性」を認め合うことの大切さを論じる。今回3つの章に分けて調査し、第1章、現代の社会的認識の中に無意識的な偏見があることで起こる差別、第2章、外面で判断するのではなく中身や心で判断する大切さ、そして第3章、「違い」や「個性」を認め合うことの大切さ、社会的弱者に対する差別・他者排除、集団の偏見で起こる差別(他者排除)をそれぞれの章のテーマとする。

■ 目的:

偏見や差別による問題は日々起こっているが、これは深刻な社会的問題であり、私達が向き合っていかなければならない問題である。そのために『シザーハンズ』のシーンを見ていく中で気づいたことや気になったこと、そして偏見や差別について示唆しているようなシーンをピックアップし、概要説明で上げた全体のテーマを明らかにする。

■ 方法:

この作品の切ない恋物語の中に描かれている、ハサミの手を持った人造人間エドワードの偏見や差別による苦悩や葛藤に焦点を当て、『シザーハンズ』の映画のシーンから流れに沿って読み解き、分析していく。気づいたことや気になったこと、偏見や差別について示唆しているようなシーンを、参考文献とともに分析する。そして、この映画をより深く分析するため、参考文献とともにこの映画の監督である、ティム・バートンにも注目し、調査を進める。

■ 結果とまとめ:

今回は、エドワードのハサミの手を1つの障害として考えて、障害の有無やあらゆるところで起きる偏見や差別について読み解いた。今回『シザーハンズ』という映画を取り上げ、偏見や差別について調査したことで、これまでとは違う視点からこの作品を観て、考え、偏見や差別について自分の色々な考えや意見を持つことができた。「エドワードの顔の傷跡は、心の傷跡でもある」と論じられているが、人種間、民族間、ジェンダー間の他にも、日常で起きる偏見や差別で苦しみ、心に傷を負っている人達が私達の周りに溢れているのだろう。しかし偏見や差別による問題を私達の日常から解決していかなければ、世界に訴えかけることは到底難しい。そのために私達は、「違い」や「個性」を受け入れて認め合い、理解する心を持つ、そして、偏見や差別に対

する正しい知識を深め、考え、行動していくことが必要なのである。

鹿児島女子短期大学 教養学科 松下ゼミ